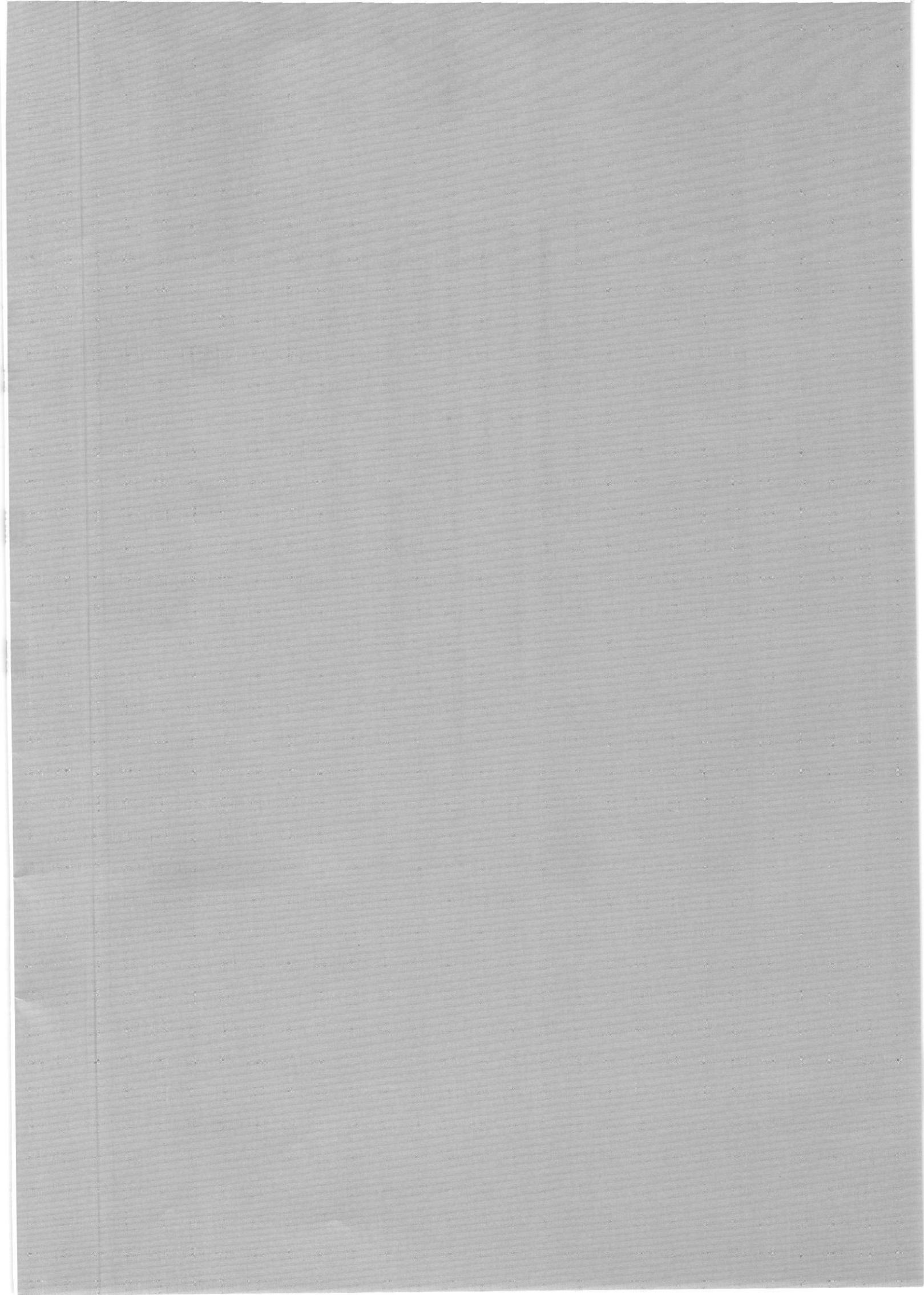


国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エ のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、** **や** **。** **や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 他人を御することは難しいことだ。
- (2) 荒天のために登山の計画が頓挫した。
- (3) 会社の上司のお供をして、もてなしのお相伴にあずかる。
- (4) 文学作品について恣意的な解釈をする。
- (5) お褒めの言葉をいただき、恐悦至極に存じます。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 踊りの優雅なシヨサに感心する。
- (2) 公園のシヨクサイを手入れする。
- (3) 事業計画のタイリヤクを会議で説明する。
- (4) 昨年の実績をシヒヨウとして計画を立てる。
- (5) 業務のイサイは後日書面にてご案内いたします。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

戦時中、洞穴で上等兵から石についての話を聞いた真名瀬は、後に岩石収集を趣味とするようになる。ある日、真名瀬は、同じように岩石に興味を持つ十歳の息子の裕晶と一緒に、野外観察に出かける。その昼休み、岩石収集のきっかけとなる上等兵から聞いた石の話を裕晶に聞かせる。

変哲のない石ころひとつにも宇宙の歴史が刻印されているのである。何億円もするダイヤモンドも平凡な河原の石も、この観点からするなら等価であり、そうした世間に流通する尺度を超えた事物の意味や価値を発明発見し、遙か高みに立って全体を俯瞰する悦び、そしてなにより世界がこうしてこのようにある不思議への驚嘆こそが、地質学ないし科学一般の魅力である、と要約すればこのように、真名瀬はあのとときの言葉を理解するようになっていて、午の休みには、溪流の木陰で弁当をつかいながら、傍らの丸石に腰を降ろした裕晶に向かって地質学の面白さを説いてみた。

いきなり抽象的な事柄を語ってもはじまらない、それになにより身に合わぬ言葉遣いは照れ臭くもあるから、子供に分かりやすくと言葉を選んでみると、いつのまにか洞穴の上等兵と同じような話し振りになるのが情けなく、また可笑しくもあつたけれど、だが考えてみれば、上等兵の話といったところで、マラリア熱の朦朧のさなか耳に入ったにすぎぬのであって、本当にあのととき彼がそのように語ったかどうかは怪しく、むしろ素人なりに地質学に熱と根気を入れてきた、自身の経験と蓄積から生まれ出た、誰のものでもない自分の言葉だとするほうが、いまとなつては自然なのかもしれない。

裕晶の鼻の頭に汗の玉が浮かんでいた。白いランニングシャツの首筋

や腕も汗に光っている。玩具のサングラスを額に載せているのが可笑しかった。祭りの屋台で買ったセルロイドのそれは彼の防護眼鏡であるのだが、白い野球帽に紫色の眼鏡をかけた、月光仮面の裕晶がひとり露頭にとりついて、一人前に軍手を嵌めた手に掴んだハンマーで岩をかかんやっている姿は、朝から真名瀬を幾度も微笑ませた。真名瀬が語るあいだじゅう、裕晶は母親譲りのまるい大きな眼で父親の顔を見つめていた。頭上のサワグルミの樹葉を透かして、柔らかくなった夏の日差しが丸石の河原に斑模様を描き、滑らかな水流はどこどころで白い飛沫を散らしながら、いかにも涼しげな響きを耳の奥に残した。川床の石群が鮮やかな色彩を帯びている。谷間の溪流は鉱物に天然の光沢を与える。岩石が最も美しく映える場所だ。

梅干し入りの握り飯を食べ終えてから、出がけに庭で採った青林檎を流れて洗った。手入れをしないから形は歪つで色も褪せ、虫食いの跡があつたりもするけれど、みずみずしい果汁の味は悪くない。子供には少々酸っぱいのか、裕晶は眉を寄せながら、それでもいい音をたてて果実を噛んだ。

食事のあとはクイズでしばらく遊んだ。父親が拾った石の名前を息子があてる、それだけの他愛のない遊びではあるけれど、夕暮れどきに親子連れ立って荒川の河原まで散歩に出れば、よくせがまれて真名瀬は問題を出してやる。最初の三つを難なくあてた裕晶は、こいつはちよつと難しいぞといって、父親が渡した灰色の小石を、掌に慈しむように包んで感触を確かめている。そうしている裕晶をみるのが真名瀬は好きで、胸に結んだ両手に石を捧げ持ち、顔を僅かに俯かせた姿勢は、慎ましく祈る者の形を連想させ、日頃は信仰も信心もない癖に、このときばかりは人間とは実に小さな者だとの思いに捉えられ、不思議な感動に心が動かされる。

裕晶はハンマーを使って新鮮な断面を作り、ルーペで覗いていたが、

納得がいかにぬらしく、今度はリュックサックからモースの硬度計を取り出した。美麗な木箱に十種類の鉱物が収められた硬度計は、夏休みになる直前、父から息子に贈られた。野外ではあまり役に立つものではなかったけれど、裕晶にしてみれば、木箱のニスの匂いもまだ消えぬ、新品の道具をはじめの野外観察に持ち出さずにはいられなかったのだらう。年若い鉱物学者は硬度「1」のタルクからはじめて、石膏、方解石、螢石と、順番に取り出しては石に擦りつけてみているが、造岩鉱物の結晶粒が十分に大きくなければ意味がなく、こうした場合には針かピンで傷をつけてみるのが実際のなのだ、真名瀬はよほど助言してやろうかと思つたけれど、教えずにはよくない、何でもまずは自分で試してみることだと笑いながら黙つてみていた。やがて裕晶は不首尾を悟つたらしく、途方に暮れた面持ちで長い睫毛をしばたいていたが、急に顔をあげ、キリヨクセキ、と答えをいった。

まず無理だろうと思つていた真名瀬は正解に驚き、どうして分かつたのかと訊こうとして、しかしはにかんだような息子の表情を眼にして、問題の石が若干緑色がかつているところから輝緑石を思いついたのだと見当がついた。本当は色は必ずしも決め手にならないのだけれど、最高の賛辞で真名瀬は息子の手柄を褒め、そのあとで、この石は結晶が細かいから、粗粒玄武岩や閃緑岩と区別ができにくく、薄片にして輝石と斜長石の結晶の並び具合を顕微鏡観察してはじめて確信がもてるのだと説明し、家に戻つたら薄片にしてみようと提案した。

——僕にやらせてくれる？

裕晶が訊いた。眩しそくに眼を細めて覗いてくるその顔は、父親が承諾するのをすでに知っている。少し憎らしくなった真名瀬はわざと意地悪く返事を洪つてみせた。

——いいが、ちゃんと最後まで自分でできるかな？

——大丈夫だと思ふよ。石を削るのはゆっくり丁寧によればいいし、

最後の硝子を貼るところだけ教えてもらえれば。

(2) こうして息子は易々と父親を超えていってしまふ。いずれ一人前になった裕晶が、最初に地質学を手ほどきした父親を懐かしんでくれることがあるだろうか、なんだか切ない気持ちになりながら真名瀬が頷くと、父親の心情を察して悼むかのように裕晶は顔を伏せ、しばらく溪流の響きに耳を澄ます形で沈黙してから、標本をリュックサックのポケットにしまった。

午休みのあとは赤平川をまた遡つて、松井田の集落近くの古い採石場跡に行つた。丘陵の土砂が大きくめぐりとられて、底部に秩父古生層のチャートと粘板岩、上層に新生代第四紀の砂礫層が重なる、露頭が剥き出しになった高い崖は化石の宝庫である。崖下の、陽に晒された石畳に立つと、石灰岩の眩い白との対照に周囲の森の緑が鋭く際立ち、息をのむ鮮やかさで迫ってくる。

簡単な化石の調べ方と標本採集のやり方を教えられた裕晶は、しばらくは黙々と崖の露頭に向かつていたけれど、めばしい成果が上がらぬらしく、ちよこまかと細かく場所を変えはじめ、そのうちに、穴があるよ、と声をあげて父親を呼んだ。みるとたしかに崖の外れの草むらの陰に、ぽっかり空いた黒い穴がある。何度も訪れていた真名瀬もこんなところに洞窟があるとは知らなくて、調べてみればどうやら石灰石の試掘の跡と推察された。

一茎の固い蔓草と刺のある茨に埋もれた、ひやり湿った匂いが鼻を撃つ洞穴の口を、裕晶は及び腰で覗き込んでいた。息子の眸に浮かんだ怯えの翳を父親は嗤つた。用心深いのは結構だけれど、男の子があまり意気地がなくては困る。眼に映るいっさいを区別なく輝かせる夏の光に、真名瀬は身も心も軽快に弾んで、穴への好奇心よりむしろ、予定の行程から僅かに外れて息子と二人未知の地境にさまよい込むスリルが嬉しくて、もちろん危険はなさそうだとの判断のうえではあつたけれど、冒険

の誘惑に導かれるまま率先して穴にもぐり込んだ。

洞窟は入口も内部も大人が腰をかがめて歩けるくらいの高さで、幅は約三メートル、何箇所かに落盤防止の木枠が据えられ、ほんの五メートルほどで板壁に突き当たった。まだ奥はありそうだったけれど、板に遮られてそれ以上は進めず、別に地底探検をするつもりではなかったものの、冒険と呼ぶにはあまりに簡単に探検は終わってしまい、⁽³⁾少々拍子抜けしながら、それでも真名瀬はマツチを擦って壁面を調べてみた。一部に緑色チャートらしい岩が見事な層理をなしているのが特筆できる程度で、あとはとりたてていうほどのことはなさそうだった。

——緑色チャートってどんな石？

裕晶が質問した。その声は洞穴の冷えた空気に響く。

——堆積岩の一種だ。古生代の生物の死骸が堆積したんだ。

生物とはコノドントや放散虫、緑色をしているのは酸化した鉄が含まれているせいだと、真名瀬はさらに詳しく説明した。

——パレオパラドキシアもあるかな？

岩壁に手で触れてみた裕晶が興奮を押し殺した唖れ声でいった。

——あるかもしれない。

——中生代の恐竜の化石は？

——それはどうかな。しかしここにはいろいろといい化石があるみたいだ。

事実には反していたけれど、秘密を共有する仲間話に話しかけるような息子の調子が嬉しくて、真名瀬はそう応え、今度はきちんと灯火の用意をして調べにこようと、親子の小冒険に彩りを添えるべく付け加えた。箱のマツチが尽き、裕晶に続いて洞穴を出ると、昼下がりの熱気が軀を押して包んで草が強く匂った。闇から出て光に灼かれた眼を静かに開けば、正面の森の緑がいよいよ黒く燃え上がった。そろそろ帰るか促すと、裕晶は先刻の臆病ぶりが嘘のように、まだ高い所にある太陽を見上

げて笑い、気取った仕種で玩具のサングラスを鼻にかけると、もう少しだけといって走りだし、露頭にとりつきハンマーを振るった。ランニングシャツに半ズボンの月光仮面。また笑いながら、日陰のない石切場に立った真名瀬は、日差しに肌がじりじり灼かれるのも構わず、幼い地質学者の仕事ぶりを飽かずに見守っていた。

(奥泉光「石の来歴」による)

〔注〕地質学——地殻の構造、性質などを研究する自然科学。

セルロイド——プラスチックの一種。

月光仮面——テレビ番組に登場する正義の味方。

モースの硬度計——ドイツの鉱物学者F・モースが考案した鉱

物の硬度をはかる基準。十個の鉱物と比較して硬度を定める。硬度1が最も軟らかく、タルク、石膏、方解石、螢石は、それぞれ硬度1〜4の基準。

秩父古生層——地層の名称。

層理——地層と地層の境界。

コノドント——示準化石の一つ。

放散虫——海産の浮遊性原生動物。チャート質岩石の成分。

パレオパラドキシア——絶滅した海生の哺乳動物。

〔問1〕 で囲んだ部分の表現上の効果について説明したものとし

て最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 「柔らかくなった」、「滑らかな」という穏やかな印象の言葉から、裕晶と一緒に過ごすはじめての野外観察の幸福な時間を感じさせる効果。
- イ 「斑模様」、「ところどころ」という不ぞろいな印象の言葉から、話すことに夢中で裕晶の反応に気づかない真名瀬の様子を感じさせる効果。
- ウ 「いかにも涼しげな響きを耳の奥に残した」という表現から、この後の岩石収集での暑く退屈な時間をより強く感じさせる効果。
- エ 「岩石が最も美しく映える場所だ」という表現から、真名瀬の話に耳を傾けずに周りの景色に見とれる裕晶の様子を感じさせる効果。

〔問2〕 ⁽¹⁾ このときばかりは人間とは実に小さな者だとの思いに捉えられ、

不思議な感動に心が動かされる。とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 真名瀬には、石に慎ましく祈りを捧げるような裕晶の姿が、大きな可能性を小さい体に秘めた尊い存在として感じられたから。
- イ 真名瀬には、小さな石にも世界の意味を見出す裕晶の姿が、自分自身の幼い頃と重なることで共通するものとして感じられたから。
- ウ 真名瀬には、祈りを捧げるように石を持つ裕晶の姿が、宇宙の歴史と対照的な人間の小ささを具現しているように感じられたから。
- エ 真名瀬には、受け取った石を大切に持つ裕晶の姿が、地質学という学問の偉大さに対する尊敬の念に打たれているように感じられたから。

〔問3〕 ⁽²⁾ こうして息子は易々と父親を超えていってしまう。とあるが、

裕晶のどのような様子から真名瀬はこのように考えているか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア いずれは困難を乗り越える力を備えていくことを予感させる、親の助けを必要とせず自ら課題を見つけて、解決している様子。
- イ 将来は十分な社会性を身につけていくことを予感させる、他者の心情を暗黙のうちに推し量って、気遣いをしている様子。
- ウ これから親の知識量をはるかに上まわっていくことを予感させる、高度な専門知識を既に有して、活用している様子。
- エ 遠からず親の手が離れていくことを予感させる、自分の能力を把握して、その能力を試そうとしている様子。

〔問4〕 ⁽³⁾ 少々拍子抜けしながら、それでも真名瀬はマツチを擦って壁面

を調べてみた。とあるが、この表現から読み取れる真名瀬の様子と説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 自分の知らない洞窟を裕晶に発見されて先を越されたと感じ、気落ちしていることを悟られまいとさりげなく振る舞う様子。
- イ 冒険気分を味わっていた洞窟探検が期待外れの結果に終わり、落胆を感じつつもまだ何かあるのではないかと諦めきれずにいる様子。
- ウ 洞窟に入ることに緊張を感じていたが、洞窟探検が終わったことで安心し、裕晶に対して父親としての余裕を見せようとする様子。
- エ 裕晶が洞窟を見つけたことに驚きを感じつつ、裕晶の期待にこたえるために洞窟の中で何かを探してやろうと躍起になっている様子。

〔問5〕 また笑いながら、日陰のない石切場いしきりばに立った真名瀬は、日差し

に肌がじりじり灼かれるのも構わず、幼い地質学者の仕事ぶりを飽かずに見守っていた。とあるが、この表現から読み取れる真名瀬の気持ちとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 目の前で元気にハンマーをふるっている裕晶が洞窟で見せた怯えた様子を思い出して、自分が親として守ってやらねばならないと覚悟を新たにすることを覚悟した。

イ 教えずぎはよくないと自制して自分で考えさせた効果があがったとうれしく思いながらも、あまりに滑稽な裕晶の姿に失笑せざるを得ない気持ち。

ウ いかにも子どもらしい格好の裕晶が一人前にふるまうことをほほえましく感じるとともに、岩石収集に熱中する姿を見続けていたいと思う気持ち。

エ 日が傾きかけても粘り強く岩石収集に取り組もうとする裕晶に対してあきれ苦笑しつつも、危なげな作業が心配で目が離せずにいる気持ち。

〔問6〕 本文の表現について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 会話文の冒頭で「――」を用いることによって、普段あまり会話をしない親子が二人きりの状態で交わすときれがちな会話のぎこちなさが表現されている。

イ 「ひやり湿った匂いが鼻を撃つ」、「熱気が軀からだを押し包んで」など感覚に訴える表現を用いることによって、真名瀬の実感が生き生きと表現されている。

ウ 真名瀬の視点に寄り添いながらも、要所要所で裕晶の視点からの描写をおりませることによって、それぞれの人物の心情が分かりやすく表現されている。

エ 時間の流れに沿って物語を展開することによって、裕晶が岩石収集の体験を通じて次第に地質学に興味を抱くようになっていく様子が表現されている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

いわゆる状況倫理的生き方は、われわれの行為が常に変化する状況のもとにあることを前提した生き方である。それは、変化する状況に柔軟に適応し、その場その場で、適切な行動を選択して生きていこうとする。ここでは、普遍妥当な規範よりも、常に変わる状況の方が、行為の主要な原理になっている。われわれは、行為を判断する時、多くの可能性の中から、ただ一つの行為を選択する。この場合、その都度その都度の状況に最も適した行為を選択する必要がある。求められるのは適切な行為である。人間は、自己の行為を選択するのに、まわりの状況を見、相手を見、場を察知して動くことができる。状況倫理的な生き方は、このような適切な対処の仕方を重んじるのである。

状況倫理的な生き方のもとでは、行為の基準は、〈汝なすべし〉^{なす}というようなカント的定言命法には求められない。その時々になされねばならない行為の基準は、一律に決められはしない。適切な行為の基準は状況に応じていくつもあり、それぞれが妥当性をもっている。たとえ相反する基準であっても、それが特定の状況に適合しているかぎり、それはそれなりに是認される。同じ一つの状況であっても、対処の仕方は多種多様であって、どれが正しくどれが間違っているというものではない。

このような生き方にあつては、人は、状況に応じた個々別々の基準に従つて、その場その場で行動するから、状況の変化に応じて、時には、従来とはまったく反対の行動様式を採用することがある。しかも、前の行動様式も、後の行動様式も、ともに適切な行動として容認される。状況は時に大きく転換するから、新しい状況には、当然、それにふさわしい行動基準が設定されねばならないのである。^①それがたとえ以前のそれと矛盾し背反していても、許される。むしろ、それは、状況に対する

柔軟な対応として称賛されさえる。

例えば、幕末の日本人は、西洋諸国の圧迫に面した時、最初は攘夷論^{じやうい}によって対処していこうとしたが、その不可能を悟るやいなや、一転して開国論に転じ、積極的に西洋の文物を受け入れようとした。これも、状況倫理的行動様式だったと言えよう。それは、表面上から見れば、まったく相反した基準に基づく行動のように見えるが、しかし、危機的状況に對して、どのようにして国家の存立をはかっていくかという点では一貫している。それは、同じ一つの状況に對して、同じ一つの目的を成就^{じやうじゆ}するための、異なった二つの対応の仕方だったのである。それは、むしろ、日本人の柔軟性として称賛されてよい行動様式であった。

^②行為は、行為者の個性と状況の関数である。行為者の個性もそれを取り囲む状況も多種多様である上に、その状況は、行為者の個性や志向によって解釈され規定された状況であるから、結果として、一つの状況に對する行為のあり方は、ほとんど無限に存在することになる。一つの状況に對するものに、一つの行動様式しか許されていないわけではない。また、どのように対処しなければならぬかという規範やルールが定められているわけでもない。行為者の個性に合わせて、どのような行動様式を選択してもよいのである。とすれば、多種多様で常に変化する状況に對しては、その場その場で臨機応変に對処し、自己の個性に合わせて行動を選択してよいことになるであろう。

われわれが面する状況は、個々別々であり、それぞれに違っている。どんなに似通った状況であっても、まったく同じということはない。さらに、現実の状況は、刻々と変わつてもいく。だから、そのような個々別々で常に変化する状況に對して、今までの経験とか、決められた手続きが、いつも間に合うわけではない。また、他人が成功したからといって、自分が同じ方法を採用しても、成功するとは限らない。すべての状況に当てはまる一般的な法則というものがあるわけではない。だからこ

そ、われわれは、常に変化する状況に対して、その都度、その場にふさわしい判断を行なって、行為を決断しなければならぬのである。

⁽³⁾ われわれは、長い人生の中で、その時々、常に新しい状況を体験しているものであり、それに対して、その場その場で自分なりの対処の仕方を獲得することによって、成長していつてもいいのである。まもなく決められた原則があるわけではない。逆に、そのような原則にとらわれていると、新しい状況を捉えそこなってしまうことがある。状況が変われば、その状況に合わせて、生き方も変わらざるをえないのである。なるほど、そのような生き方は一貫性のない生き方だと、非難されるかもしれない。しかし、状況は絶えず変わっていくのに、自分だけは、いつまでも一つの方法に固執しているのでは、柔軟性のない機械的な生き方だと言わねばならない。内面の一貫性を守るためにも、新しい状況に対しては、柔軟に対応していかなければならないのである。

環境に安定というものはない。環境は絶えず変動している。変化するということが常態である。世界は常に生成の過程にあるからである。だから、人生の生き方にしても、国家や企業の経営にしても、戦略の中に常に変化を読み込み、めまぐるしく変化していく状況に対処していかなければならない。われわれは常に新しい状況に面しているのだから、状況に関する知識を絶えず導入し、自己自身の戦略と照らし合わせながら、戦略を絶えず修正し、新しい解決法を見出しつつ、変化する状況に弾力的に対処していかなければならない。その意味では、あらかじめ戦術や戦略を決めて、最初から最後までそれに固執していると、状況の変化に面しかえってあわてふためくことにもなる。

昔から、東洋では、常に変化する状況に対して、われわれはどのような行為すべきかが論じられてきた。現に、韓非子^{*かんぴし}も、「事は世に因り、備えは事に適す」と言っている。時代が変われば、物事は変わってくる。物事が変化すれば、それに対応する手段も変わる。物事は時代

とともに変わり、対策は物事に適切なようになさねばならない。過去の事例にこだわってはならないというほどの意味である。韓非子によれば、時世は休むことなく進んでいるのだから、かつて聖人の行為として崇められた仕事も一般化してしまえば、時代後れともなり、新しい聖人の笑い物にもなる。だから、聖人は、必ずしも、古に從い、一定不変の道に則ろうとはならない。今日の事情に合わせて、それに応じた方策をつくり備えなければならぬ。韓非子は、旧来の陋習にとらわれず、情勢の変化に応じて、それにふさわしい対策を立てるべきことを主張したのである。

しかしながら、状況の変化に合わせて柔軟に対処していく行為ばかりでなく、逆に、状況に積極的に立ち向かい、状況を変えていく行為があることも、見逃すことはできない。われわれは、状況に合わせて生きていくばかりでなく、状況を変革していくことができる。われわれの行為は、状況に限定されるばかりでなく、状況を限定する。場が変わることによって、行為も変わるが、行為が変わることによって、場も変わる。世界は、ものごとの相互連関性によって成り立っている。われわれは、この相互連関性に規定されて行為すると同時に、われわれが行為することによって、相互連関性を変えられていく。⁽⁴⁾ かくて、世界の生成は起

きる。現に、歴史上で行なわれた一つの行為が、その時代環境に生かされて、次々と共感を呼び、社会の大きな変革につながっていくことがある。それどころか、歴史上で活躍した革命家たちは、時代環境がまだ味方していない時でも、単に時代の成熟を待つのではなく、自らの行為によって状況をつくっていくという考えをもっていた。行為は、状況がなければ効果を発揮することができないが、その状況は、また、自らの行為によってつくられていくのである。そのことによって、状況は打開され、時代は開かれていく。時代は、人々にとって、一種の運命として立ち

だかるものであるが、しかし、それは、自己自身の積極的な行動によって切り開けないものではない。運命は、完全に人を支配しているものではない。⁽⁵⁾このような観点に立つなら、時代状況がどのようなものであっても、自己の信じるところに従って行動し道を切り開く積極的行為が、何ものにも代えがたいものとして評価されねばならない。行為は歴史を開くのである。

このような行為の積極的面に注目するなら、単に時代の流れに適合して動いていく生き方ではなく、時代の流れに抗して、逆に、その流れを転換していく行為のあり方を、歴史を動かす積極面として位置づけなければならぬ。この場合には、行為者と状況は矛盾した関係にある。行為者は、時代の逆風に抵抗しながら道を切り開いていかねばならないという緊張状態に置かれている。自らの行為が、時代の流れに支えられていないからである。それにもかかわらず、行動主義者は、時代と戦い、時代に反抗し、時には、その時代の規範をも破り、時代を切り開いていく。おおむね、時代の変革は、このような例外者の先駆的な行動から起きてくるものである。

*^{そんし}孫子も「兵とは詭道なり」と言う。通常、詭道と言えば奇計や策謀、権謀や術数の意味で理解され、何か好ましくないもののように思われている。しかし、これは、本来は、上下遠近を顛倒させる方策のことを言う。状況を一気に顛倒させる運動が詭道なのである。一つの方向でしか考えられていなかったものを、反対の方向からながめて、別の方策を立て、それを梃子として、状況を自らに有利なように転換することを狙ったものが、詭道である。それは、行為によって新しい状況をつくりだすことができるということ、前提している。状況は、人間にとって、すでに与えられた運命という側面をもつと同時に、人間が積極的に立ち向かうことによって、新しくつくりだしていくことのできるものでもある。孫子は、この面に注目して、戦略論を展開したのである。

われわれの行為は、状況や時代、さらに自然万物の大きな流れに支えられている。しかし、それは、また、そのような場でわれわれが行為するということと別物ではない。行為は生成の中にあると同時に、行為が生成を起こす。生成によって行為はあると同時に、行為によって生成は起きる。われわれは、生成を行為しているのである。とすれば、単に、成り行きに任せて、それに逆らわずに動く行為ばかりでなく、その成り行きをつくりだしていく積極的な行為がなければならぬ。⁽⁶⁾流れに任せる行為ばかりでなく、流れをつくる行為も見落としてはならない。すべては、生成の中であって、生成を担っている。生成流転する世界の中の一つの行為は、その中に生成流転する世界を映し取っていると同時に、その中から生成流転する世界を紡ぎ出してくる。どんな行為も、無意味なものとして運命づけられてはいない。

(小林道憲「動く倫理学を展開する」による)

〔注〕カント的定言命法——十八世紀のドイツの哲学者であるカントの唱えた、カント的倫理学における、意志を無条件的に規定する道徳法則。

韓非子、孫子——ともに中国古代の思想家。

〔問1〕⁽¹⁾ それがたとえ以前のそれと矛盾し背反していても、許される。

とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 状況が常に変化することを前提とすれば、その状況に対応するために選択される行為も、これまでとは異なるものが称賛されるのが当然だから。

イ 変化し続ける状況に対応するために行った行為であれば、それが倫理的に適切であるかどうかにかかわらず、認められなくてはならないから。

ウ 普遍的な規範は、絶えず変化していく状況に対しては適切ではないので、それと相反した行動様式の方が人々に受け入れられやすいものだから。

エ 状況倫理的な生き方においては行為自体が状況に応じて変化するものであり、状況に適応しているならば、従来との異同は問題ではないから。

〔問2〕⁽²⁾ 行為は、行為者の個性と状況の関数である。とあるが、どうい

うことか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 状況は行為者の個性によって認識され、その認識した状況に対して行為者が選択するものが行為であるということ。

イ 行為とは、社会的に規定された状況に対して行為者それぞれが個性に応じて行うものであるということ。

ウ ある行為者の個性によって状況に適した行動様式が選択され、それが広く状況を規定していくということ。

エ 行為は行為者一人だけでなく、多様な個性のもとで選択された多くの行為と関係のあるものであるということ。

〔問3〕⁽³⁾ われわれは、長い人生の中で、その時々、常に新しい状況を

体験しているものであり、それに対して、その場その場で自分なりの

対処の仕方を獲得することによって、成長していてもいるのである。とあるが、ここでいう「成長」とはどういうことか。その説明

として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 様々な状況に柔軟に対応していく中で、次第に状況自体の変革を目指した行為を選択することができるようになること。

イ 状況が変化していく中でも自己の内面を保ち続けるために、状況に応じた柔軟な対応をとることができるようになること。

ウ 過去の事例や慣例を多く学ぶことで、あらゆる状況に対応する際にそうしたものに依拠した行為を排除できるようになること。

エ 状況に応じて戦略を修正するために、状況に関する知識を得る努力を不断に行うことで冷静な対処ができるようになること。

〔問4〕⁽⁴⁾ かくて、世界の生成は起きる。とあるが、ここでいう「世界の生成」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 状況を変革しようとした際に、その変革の対象としての世界を明確に捉えるために行為とものごとの相互連関性を切り離し、世界が限定されていくということ。

イ 状況倫理的な生き方は変化し続ける状況が前提であり、人が柔軟な対応を選択することで、世界の様々な関係性がより強固になっていくということ。

ウ 時代環境に合わせて、運命を可変的なものとして切り開いていくことと積極的に生きることとで、世界の相互連関性が組み換えられていくということ。

エ 状況倫理的な生き方とは異なり、状況を変えようとする行為によって生成過程にある世界の諸関係に影響を与え、改めて世界が紡ぎ出されていくということ。

〔問5〕⁽⁵⁾ このような観点に立つなら、時代状況がどのようであっても、

自己の信じるところに従って行動し道を切り開く積極的行為が、何ものにも代えがたいものとして評価されねばならない。とあるが、「評価されねばならない」と筆者が述べたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 積極的な行為は、ただ状況に合わせて生きていく消極的な生き方とは違い、自分の目的を明確にもって時代さえも顧みずに行う勇氣が必要な行為であるから。

イ 積極的な行為は、時代に束縛されていた人々を解放したという歴史的な意味をもち、さらに次の変革者を生み出す契機ともなりうる行為であるから。

ウ 積極的な行為は、その行為者が生きる時代や環境に流されることなく、自らを孤独と緊張の中へ追いやりながらも、既存の状況を打開していく行為であるから。

エ 積極的な行為は、今でこそ志のある一部の例外者が行うものであるが、そもそもは旧来の慣例にとらわれることのない聖人のみが行える行為であるから。

〔問6〕 本文の構成・表現の特徴を説明したものとして最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 論理の段階的なまとめとして歴史的な事例を挙げ、説得力のある論理展開を構築している。

イ 冒頭に結論を置き、個別の事例を検討しながら断定的な表現を多用して文章を構成している。

ウ 幕末の日本の開国論と古代中国の思想の対比が、本文で提示される生き方の対比となっている。

エ 異なる二つの生き方を述べ、最終的に筆者独自の考えとしてそれらを統合した生き方を提示している。

〔問7〕⁽⁶⁾ 流れに任せる行為ばかりでなく、流れをつくる行為も見落とす

てはならない。とあるが、「流れをつくる行為」とはどのような行為であるか。本文に即して、適切な具体例を挙げて、二百字以内で説明せよ。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された古文の後の（ ）内の文は、出題に際して付けた現代語訳である。

（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

どうしたら晴れの場の歌よみの一人となれるか。どうしたら歌合に勝利を得られるか。またどうしたら撰集のチャンスにめぐりあつて入集がはたせるか。歌への執念を心に抱いて、試行錯誤を繰返しつつ悩む歌人たちの姿が、説話にはさまざまな克苦の業とともに伝えられているが、一番リアルな努力と工夫が払われているのは言葉の問題である。失敗もあり、論争もあり、発見もあるが、どれも今日の問題とつながるものばかりであるのが感銘深い。

A 惜しむべき春をば人に厭はせて空頼めにやならんとすらん

*いなば
因幡

この歌は「夏^ニ契^ル恋」という題で詠まれた歌だが、折ふし合評の歌合で、人々に好評だった。ただ問題点として出された点がある。「春をば人に」というところで、この曖昧さがよくないというものだ。

代案は「春をばわれに」とすれば明快にわかり、いつそうよい歌になるという意見である。

「名残惜しいはずの春なのに、その春をさえ、私にとつては厭わしいまでにつれなく逢おうとしないあなた。たぶん『夏には逢おう』という約束さえ、当てにならないものになってしまうでしょう」という内容なので、「人」は、はっきり「われ」とする方がよいというのである。

*俊恵はこの一部始終を聞いて、「何という歌ごころのないことをいうものか」と歎き、「人に」といったからとて誰が「われ」以外のものを想像するだろう。「惜しむべき春をばわれに厭はせて」といったなら、

「われ」が突出して歌がらがまことに品位低くなるのがわからないのだろうか。より明快かどうかはさておいて、これはやむを得ず、「人に」と詠んだのがよい、と決断した。

(1) 「人」という言葉は、「百人一首」にも頻出するように、和歌の世界では大きな用語である。不特定の世間一般の「人」として使われた例は「百人一首」中十二首、相手の人をさして間接的に「人」とよんだ例は七首ある。このように「百人一首」のうち、五分の一近くに「人」が登場するのを見ても、「人」への関心の高さがわかるが、それに付随して「君」というところをあえて「人」という間接の表現を用い、かえって余情のふくらみを感じさせる方法に人気があったことがわかる。

しかし、ここにあげた女房因幡の歌は、「貴方」という代名詞としての「人」でもなく、「われ」の代名詞としてのもので、新しい使い方である。いまの『古語辞典』にもこの例は出てこないが、一首の中で、たしかに「人」は「われ」以外ではありえないから、「人」の表現には詩的な余情が生れている。同じような使用例がなかなか見つからないが、現代にはかえって「人の気もしらないで」とか、「人のことを何と思っているの」というように、よく使われているのが面白い。

もう一つ言葉発見の例をあげよう。清輔の『袋草紙』では、清輔の父^{清輔}の歌を俊頼が賞めた逸話として載っているが、俊頼はこの歌の面白さを息子の俊恵に語っていたらしい。⁽²⁾しかし愉快なことに賞めどころがちがうのである。

B 逢ふと見て現のかひはなけれどもはかなき夢ぞ命なりける

頭輔

（恋しい人に逢う夢を見ても現実に逢える効果はないが、この頼りない夢が、私の生きているという命そのものであったのだよ。）

顕輔は俊頼より三十五歳くらい年下であるから、大長老に激賞されたことになる。この歌が『金葉和歌集』に入集した大治二年（一一二七）からみれば俊頼は七十二歳ぐらいい、顕輔は三十七歳ということになる。俊頼はこの歌をいたく感銘したらしく、「これは椋の葉磨きして、鼻脂引きたる歌なり。世の常の人ならば、『現のかひはなければもはかなき夢ぞ嬉しかりける』とぞよままし。⁽³⁾ たがかくはよまんぞ」と賞揚してやまなかつた。

「椋の葉磨き」などという比喩も今日からは珍しくて面白いが、乾かした木賊の葉や桃の核、椋の葉などは、木材などの表面を磨くのに必須のものだった。そういうもので念入りに磨いた上に、多少俗っぽい職人が「鼻脂引く」というように、最後の仕上げに念を入れ、表現の完璧を期した歌だという。どこがその「鼻脂引く」に当るかといえば、ふつうこの歌の下旬は「はかなき夢ぞ嬉しかりける」となるのが穩当の仕上りだが、顕輔は「嬉し」の代りとして「命なりける」という結句を用意した。「誰がこんな言葉を思いつくだろうか」と俊頼が激賞したところをみると、「命なりける」の新しい使い方であつたらしい。

大切なものを「命」という比喩で表現することは、『万葉集』の中にも沢山ある。しかし、それはもちろん、本来的な「生命」を表わす言葉を基本としたものである。それが、平安朝和歌の中では、燃焼度の高いエネルギーの比喩として、「命にもまさりて惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり」（壬生 忠岑）（命にもまさりて惜しいものであるのは、最後まで見終わらないうちに思う人との逢瀬の夢がさめることであるよ。）のように使われるようになってゆくのだ。顕輔のように、結句に「命なりけり」や「命なりける」を用意した歌もないわけではない。

C 春毎に花のさかりはありなめどあひみむことは命なりけり

よみ人しらず

D 今ははや恋ひ死なましをあひ見むと頼めしことぞ命なりける

*きよはらのふかやぶ
清原深養父

「春毎に」の歌は『古今和歌集』のもので、「春毎に花は咲くだろうが、その花の盛りに会うことができるのは『命』あつての事なのだ」という。花との出会いに擬人的気分がある詠嘆である。これに対して、深養父の歌は、「必ず逢おうと約束したことだけが命の支えだ」とうたっている。ここで従来「命」の意味に広がりが生れた新鮮さがある。このように、「命」を「命の支え」という意味合いで使った歌は、じつは顕輔にもある。「今はさは逢ひみむまではかたくとも命とならむ言の葉もがな」（今はそれでは、逢い見ることまでは難しくとも、命の支えとなる言葉がほしいものだなあ。）という歌で、そうした「命」という表現の工夫のあとをたどってみると、顕輔がこの「命なりける」を、「嬉しい」という感動の代りとして結句に据えるに至るまでには、かなりの試行の間があつたのだろうと思わせられる。

それも面白いが、俊頼のように、顕輔の狙いが「命なりける」の表現にあることを一目で見ぬいて、そこを賞揚する人々ばかりではなかつたらしい。なんと顕輔の子の清輔が著した『袋草紙』では、全くちがうところに俊頼が感心したことになっている。「逢ふと見て現の甲斐はなけれども」というところを、ふつうならば「逢ふと見て現に甲斐のなければ」と詠むところを、「現の甲斐」と言つたところが並々でなく、この「の」の字一字のちがいでこそ「鼻脂引く所なり」というのである。結語として、「詩歌はただ一字なり」という戒めは背けるのだが、感心したところの差は歴然としている。伝聞してゆくうちに、俊頼がほめたところがわからなくなってしまう、当て推量に「ここか」と「の」の字を押えたような可笑しさがある。

「命」という言葉をどう使いこなしてみるかという工夫が、ある歌人

たちの中でずつとつづいていたことがわかるのは、ひじょうに貴重なことだと思ふ。「命」という一語の効用を面白く、持続的に工夫してきた歌人のいとなみは、一語を大切に作る歌人の姿勢にはかならない。

(馬場あき子「歌説話の世界」による)

〔注〕因幡、俊恵、清輔、顕輔、俊頼、壬生、忠岑、清原深養父

——いづれも平安時代の歌人。

女房にようぼう——貴族の家に仕えた女性。

『金葉和歌集』——白河法皇の命令により編集された平安時代の

歌集。

恋ひ死なましを——死ねるものなら恋いこがれて死んでしまいたい。

〔問1〕「人」という言葉は、「百人一首」にも類出するように、和歌の

世界では大きな用語である。とあるが、Aの歌の「人」という言葉の使い方を説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 現代の二人称の代名詞としてではなく、不特定な人を明快にわかりやすく表現した使い方。

I 相手を指して間接的に表現するのではなく、自分自身を遠回しに表現した斬新な使い方。

U 特定できない一般の人を指すのではなく、相手の人を指して間接的に表現した現代に通じる使い方。

E 一人称の代名詞として用いる用法ではなく、世間一般の人を余情をもって表現した使い方。

〔問2〕⁽²⁾しかし愉快なことに賞めどころがちがうのである。とあるが、

どのように違っていたのか。その説明を次の□内のようにまとめるとき、(①)、(②)に当てはまる最も適切な言葉を、本文中からそのまま抜き出して書け。

並の詠み方ならば使うはずの言葉をあえて使わず、結句として(①)という表現を用いた斬新さをほめたことになっているものに対し、『袋草紙』では、(②)という助詞を用いた、言葉の選び方の巧みさをほめたことになっている。

〔問3〕⁽³⁾ たがかくはよまんぞの意味として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 誰がこのような詠み方をしないのか
- イ 誰の詠み方にならったのだろうか
- ウ 誰でもこの詠み方はわかるだろう
- エ 誰もこのような詠み方はしない

〔問4〕 和歌B、C、Dにおける「命」の語の用いられ方について筆者の考えを説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア Bの歌では「大切なもの」という意味で使われているが、Cの歌では「命の支え」という意味で使われ、Dの歌では感動表現の代用として使われていると考えている。

イ Bの歌では詠嘆的な気持ちのこもった「命の支え」という意味で使われているが、Cの歌では平安朝に用いられた本来的な「生命」を表す意味で使われていると考えている。

ウ Bの歌では従来と異なる用法で感動を表す表現として使われているが、Dの歌では「命の支え」という新しい意味で使われていると考えている。

エ Cの歌では本来の「命」を支えるものという意味で使われているが、Dの歌では「大切なもの」という広がりをもった意味で使われていると考えている。

〔問5〕 本文中における筆者の考えの説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 歌合での名誉を求めた歌人たちの言葉にこだわる努力は、名歌を生んで賞賛されたが、言葉の新しさは時代とともに忘れられて、かえって名歌とは何かが論争の的となった。

イ 歌合に勝ちたいという欲望をもった歌人たちがさまざまな試行錯誤の果てに見出した一語を、さらに他の人が継承発展する中で、詩歌における言葉の意味の広がりが生み出されてきた。

ウ 歌合での勝利を求める歌人たちの欲望は一語へのこだわりを生み、さまざまな工夫の末に見出した従来とは異なる表現方法が、今日にもつながる新たな文学のあり方をもたらしした。

エ 歌合における名誉を得たいという歌人たちの願望は、言葉に新しい意味をもたらしたが、その意味が定着していくことによって本来の言葉の意味が忘れられることとなった。

